

# コミックの中の女性アスリート

## A representation of woman athlete in comics

1K06B142

対馬 伶奈

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

副査 宮内孝知先生

### 【目的】

現在女性アスリート達の活躍は目覚ましい。オリンピックや世界大会など世界レベルで活躍し、日々メディアを騒がせている。オリンピックにおける日本選手団の男女の割合もほぼ男性と女性で半分になっている。一般社会でみても女性の進出は進んでおり、様々な分野に参画している。今や「男は仕事／女は家庭」は古臭い価値観とされ、公の場で言われることはなくなった。しかし、本当にその価値観は消え、男女平等社会が実現されているのだろうか？この論文では1970年代以降の女性アスリート達が主人公となるコミックの中で、彼女達がどのように描かれてきたのかを調べ、年代ごとに求められる女性アスリート像と、その周辺関係がどう変化してきたのかを分析した。

### 【分析】

70年代女性アスリートコミックとは、力ある男性指導者に見出され、男性によって支えられるシンデレラストoryである要素が強かった。また周囲のキャラクターの役割もコーチ・憧れの先輩・ライバルなど固定的で一貫してイメージが変化せず、ステレオタイプが強かった。80年代には女性が力をつけ、男性にも劣らない才能と実力で男性の世界に切り混む姿が描かれていた。一方で女性らしさを求める傾向が強くなり、主人公は男性にも勝る実力と女性らしいイメージとの間で苦しんでいる。90年代の主人公は力あるコーチに才能を引き出される、シンデレラストory的な要素もあるが、そこまで

指導者との依存関係をつくってはいない。主人公は自立しており、その上で力ある男性に引き上げられる。また女性指導者も存在している。そして現代の主人公は女性の指導者に力を見いだされ、女性に支えられて才能をより開花させていく。又、これらの主人公の容姿は全員が「小柄」もしくは「華奢」な体型であった。全員が周囲のキャラクターと「恋愛」をし、「涙」をみせる精神的に弱い一面が存在し、主人公はいずれも才能ある女の子として描かれていた。また、周囲のキャラクターはステレオタイプだけでなく、さまざまな体型や考え方の先輩同輩の存在が見られるようになった。

### 【結論】

70年代以降現代まで、主人公となる女子アスリートに求められるものはあまり大きな変化を見せておらず、性格でいえば「優しさ」「素直さ」、容姿でいえば「小柄」「華奢」「涙」などステレオタイプの「女らしさ」から抜け出せていない。しかし主人公を上に取り上げる役割を担う指導者という力のあるポストにつくのは、男性キャラクターから女性キャラクターになってきている。1970年代以降女性の社会進出が進み、力のあるポストに女性つくようになった社会的背景が存在する。また、主人公には「女らしさ」が求められるが、周りの女性アスリートのキャラクターには、容姿でいえば「高身長」や「肥満」「大柄」、性格でいえば「強気」「寡黙」「豪快」などの様々な個性が認められるようになった。

このさき、主人公にも「才能」「女らしさ」以外の個性を示してもらいたい。